

錦織健プロデュース Vol.6

スペイン貴族の娘コンスタンツェと侍女のブロンデ、コンスタンツェの恋人ベルモンテの従僕であるペドリロの3人が海賊につかまり、太守セリムに売られた。ペドリロからの手紙を見て救出に向かう青年貴族ベルモンテ。太守の後宮に着くと、かなり年配のオスミンがいて、ブロンデに横恋慕して、ペドリロを邪魔にしている。太守セリムもコンスタンツェを妻にと望む。

後宮で庭師をさせられているペドリロの手配で、建築家と称したベルモンテが潜入して救出作戦開始。ところが酒を飲ませて眠らせたはずのオスミンに気付かれ、全員囚われる。ベルモンテの父親が自分の敵だったと知った太守は、復讐のチャンスが来たと喜ぶが、考え直して全員を解放する。全員はその慈悲に感謝して、太守を讃える。「許す」ということを教える作品。

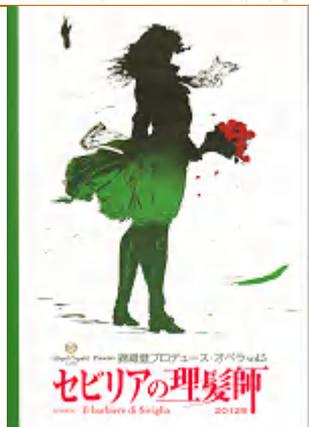
【感想】歌はドイツ語、台詞は日本語。しかし歌詞が簡潔なため違和感なし。オスミン志村文彦さんの低音の音階と演技力、ベルモンテ錦織健さんの表現力とロングトーンは素晴らしく、台詞のみの太守池田直樹さんは存在感があった。



Aribert Reimann 二期会

ギリシャ神話。コルキスの王女で魔法を繰るメデアはイアソンと恋に落ち身内を裏切る。幸運を招く金羊皮を手にして二人で逃れた先のコリントで2人の子を産むが、コリント王が娘の夫にイアソンを望み、イアソンも承諾する。怒ったメデアは復讐を誓う。(メデア=メディア コリント=コリントス)

【感想】片方のセリフが言葉なら、片方のセリフは伸ばした音だけというように言葉同士がぶつからず、歌の主張の時には音楽の小節は全休符。さらに音の切れ目はブチッでもブツッでもなくピッ！と絶妙。というように演奏と歌が連動し合っているの音および演技の「空白感」がない。音の区切りがはっきりしているのに、淀みなく流動感のあるオペラ。舞台上左右に金管楽器を配したのも演奏上全く問題なく、逆に金色に光った楽器が演出効果となる。この日のソプラノ：飯田みち代さんの心理描写に満ちた歌声は圧巻。宮崎アニメの「カオナシ」のように白い仮面をつけたダンサーたちが、歌い手の周りでその役の心理(苦悩など)を踊りで見事に表現したのが、感情伝達に絶大な効果を上げたオペラ。



錦織健プロデュース Vol.5

スペイン南部セヴィーリャ。資産家の両親を亡くした美女ロジーナは、彼女と結婚を企てる後見人の医師：バルトロに悪い虫がつかないように見張られている。そこで彼女に一目惚れしたアルマヴィーヴァ伯爵は「学生：リンドーロ」と身分を偽り彼女に近づく。リンドーロに好意を寄せるロジーナは彼が伯爵と同一人物だとは気付かない。なかなか彼女に愛が伝わらない伯爵は何でも屋の理髪師：フィガロの力を借りて彼女を略奪する作戦を開始する。

【感想】ロジーナが恋人に手紙を書いたのではないかと疑ったバルトロ(志村文彦さん)が、紙の枚数をイタリア語で1,2,3,4,5(uno, due, tre, quattro, cinque)と数える場面。そのくらいのイタリア語は解る客席からドツと笑いが起こった時、志村さんがアドリブでそれを繰り返してくれて客席から拍手喝采！またアルマヴィーヴァ伯爵(錦織健さん)が、ロジーナの音楽教師バジリオ(池田直樹さん)の弟子に化けて潜入したとき、声色を変えて低音・高音を使い分けて歌ったのはさすが！「親しみやすいシンプルな展開」を各人の「個性と技」で決めたオペラ。



錦織健プロデュース Vol.4

スペイン・バスク地方の小さな村。純情な青年：ネモリーノは農場主の娘：アディーナに思いを寄せている。彼女にうまく愛を伝えられない彼と、内心では彼の愛の告白(欲得ではない真実の愛)を待ちながら、自分からは言えない彼女。小心なネモリーノが「愛を手に入れられる妙薬」(実は安物のワイン)に騙されてアディーナに強気な態度を取って失敗し、怒ったアディーナは当てつけに村にやってきた軍曹：ベルコーレの結婚の申し出を受けてしまう。自暴自棄になったネモリーノは、ついには恋敵の軍隊に入ろうとする。本物の愛を手に入れるまでのドラマ。

【感想】アディーナの愛の本心を確信する場面でネモリーノが歌う「人知れぬ涙」では客席も神妙。対して「愛の妙薬」を飲んで酔っ払うシーンは奔放。ソプラノの美しさが際立つオペラ。男の弱気と強気、女の本心と意地の演じ分けがポイント。一見単純に思える内容を一流の歌手ならではの安定感で楽しめたオペラ。



Tricia Macpherson present  
by Ken Hill

パリ・オペラ座には不思議なことが起こる。ある日、新しく赴任した支配人のもとで、その怪奇現象が解明されていく。それはオペラ座の地下に潜む男の仕業だった。彼は生まれながらにして醜い外見を持つ反面、天使の歌声を持っていた。外見故に世間の人々から疎まれた男は大いなる野望を抱いた。

オペラ座に勤める人々の間で起こる役争い、恋人同士の愛の葛藤を背景に、地下に住む怪人を通して「真実の愛」「美しき精神」「運命」を問いながら、人生の悲喜劇と神への信仰を描いたフランス作品のイギリス版オペラ。

【感想】イギリスというとシェイクスピアを思い浮かべるが、イギリスには「舞台」という言葉が相応しい独特な安定した雰囲気がある。「澄んだ空気感」とでもいうのだろうか。現実でもなく、異次元でもなく、不思議な世界へ誘われる。自分ではコントロールできない生理的感覚によって受け止められる「外面の美醜」 人生の中で培われた気高き精神によって受け止められる「内面の美醜」人は天から与えられた運命の中でいかに生き抜くべきか？人生の愛憎の交差点で。